

『石城唱和集』 寸断〈下巻の部〉

宮崎修多

本稿は、近世期、享和から文化年間における福岡漢詩壇の様態を窺うに屈指の資料、版本『石城唱和集』を、現存資料から出来るだけ成立事情や年次を推定しながらいくつもの唱和群に細分化し、この詩集のより有効な利用を目途としたものである。それによって地方詩壇の拡がり与其他国文人らとの関連はもとより、当代における唱和集と銘打たれた総集の編纂過程を考える一助ともしたい。今回はその下巻の分析を試みる。上巻の考察は『石城唱和集』寸断〈上巻の部〉（成城国文学論集 第二十三輯 平成七年三月刊）、本文の複製は『石城唱和集』寸断〈複製の部〉（成城国文学論集 第二十五輯 平成九年三月刊）にそれぞれ発表・紹介したが、本稿はその続編にあたる。

唱和群各々の記述の体裁は、〈上巻の部〉に掲げた「凡例」に準じて次の通り。

○詩群番号 仮題（版本での位置、詩の通し番号）

詩題とその作者、次韻の様子、

詩体と韻字、

* 以下に愚按。

本文はいちいち引用しなかったので、〈複製の部〉を併せ参照願うより他はない。また所収詩人の名列も、既に〈上巻の部〉に載せたので、紙幅の都合上ここでは省略したことをことわっておく。

○第50群ノ一 文化元年新年詠（下巻1オ〜1ウ、207〜210）

「甲子新歳口号二首」宜春↓（和）幻弁

七言絶句二首、韻字①「霜・強・郎」（下平声七陽）②「堂・忙・腸」（下平声七陽）

*上巻が一統して享和三年一年間の詠が春夏秋冬、ほぼ成立順に並んでいたのを受け、この下巻は翌甲子文化元年の元旦詩より始まる。

▽第50群ノ二 文化元年新年詠続き（下巻1ウ〜2オ、211〜214）

「甲子新歳作二首」幻弁↓（和）宜春

七言絶句、韻字①「憂・酬・鷗」（下平声十一尤）②「通・同・風」（上平声一東）

*前唱和に続き、今度は幻弁から福岡藩士戸次^{べっ}宜春にあてた新歳詩に、宜春が返したもの。ほぼ同時期とみて一括した。

○第51群ノ一 文化元年人日詠（下巻2オ〜2ウ、215〜216）

「甲子人日戲作」宜春↓（同）幻弁

七言律詩（宜春）、韻字「生・盈・傾・清・榮」（下平声八庚）

七言古詩（幻弁）、韻字「晴・生・行・明・鳴・京・情・更・鶯」（下平声八庚）

*今度は人日一月七日に、宜春が幻弁に詠みかける。その雅境に感じた幻弁は発奮、長詩をもって報いたのであ

った。

▽第51群ノ二 首春詠続き（下巻2ウゝ3オ、217ゝ218）

「首春呈幻弁尊者用其佳什韻」宜春↓（和）幻弁

七言絶句、韻字「松・鐘・峰」（上平声二冬）

*宜春の用いた幻弁の韻とは、上巻末辺に掲載された、呉梅処と幻弁との唱和に発する（143ゝ144）諸子唱和（203ゝ206）での韻を指す。前年末の詠をうけたこの宜春作は、前項の人日詠とともに幻弁に郵致されたものと推測できるので、前群と一括してみた。

○第52群ノ一 文化元年菊舎尼献酬（下巻3オゝ3ウ、219ゝ220）

「博多客舎和答亀老君見贈」菊舎↓（菊教尼之在博多余以詩問慰次韻見謝詩佳甚有刮目之嘆疊韻却寄）南冥

七言絶句、韻字「更・声・情」（下平声八庚）

*俳人菊舎尼（一七五三ゝ一八二六）は、長府藩士田上由永の女。夫と死別し本籍に復してのち、美濃派の俳諧師として諸国を遊歴していた。七絃琴の名手でもある。最初の九州行は天明六ゝ七年で、福岡における南冥との初見は天明六年九月末。その後、寛政八ゝ十年の長崎・佐賀滞在時には博多に立ち寄った形跡なく、この文化元年の博多滞在は、彼女にとって二度目で、菊舎五十二歳、南冥六十二歳。前享和三年十月頃から豊後に入り、十二月には福岡に來たり南冥と再会。高田氏の宅にて越年（享和四年、文化元年改元二月十一日）して、三

月まで福岡に滞留、その後熊本、久留米、竈門山に登った後小倉に出て、年末には長府に帰宅している。以上、菊舎の動向はすべて上野さち子編『田上菊舎全集上・下』（平成十二年十月和泉書院刊）所収の諸作、ならびに上野による「田上菊舎略年譜」によった（以下も同じ）。南冥詩稿『壬戌・癸亥・甲子稿』（亀井昭陽編か。慶応大学斯道文庫蔵、『亀井南冥昭陽全集』第八卷（上）所収）には、この文化元年正月前後福岡における南冥との応酬が多く記載される。享和三年末の再会時には、菊舎が雪竹画の自画賛を携えて南冥宅を訪問、南冥もそれに感じて詩を呈しているが、題詞に全集未収の菊舎句が見えるので引用しておく（癸亥稿）。

長門菊舎女史見訪、贈以雪竹画、賛曰仰起慕不玉農光里也雪乃中、賦以謝呈

淇園雪庄竹生烟 有似驪龍潛在淵 今日任君探領下 春雷震起十年眠

この南冥詩20が疊韻となっているのは、年あけ早々南冥が次の如く贈詩し（甲子稿）、

首春夜雨懷菊教尼在博多

雨吹松塢欲三更 似聽騷人絃上声 今夜清閑応未睡 試操南雅慰羈情

これに菊舎が次韻（219、菊舎『手折菊』（文化九年刊）にも収録）した、それへの却韻だからであった。『手折菊』によればさらに菊舎は南冥に発句付きで返している。

孟春再疊韻奉謝南冥先生見贈

七絃彈罷到天明 窓外曉鷺三兩声 一自陽春伝絶唱 西方日々美人情

遊ぶこゝろ日々に引るゝ柳かな

▽第52群ノ二 菊舎尼献酬続き（下巻3ウ→4オ、221→222）

「贈長門菊舎尼」宜春↓（和）菊舎

七言律詩、韻字「陰・深・琴・心・音」（下平声十二侵）

*この宜春詩も南冥との応酬とほぼ同時期であろう。この菊舎詩²²²は『手折菊』にも掲載、発句「言の葉のはなやからうた和歌」も添えてある。

○第53群ノ一 漫興詩（下巻4オ→4ウ、223・224・226・227）

「漫興呈幻弇師二首」宜春↓（和宜春漫興見寄二首）幻弇

五言絶句二首、韻字①「何・多」（下平声五歌）②「譚・家」（下平声六麻）

▽第53群ノ二 宜春字詩（下巻4オ→4ウ、225・228）

「答人間余名朝字曰叔陽」（宜春）↓（同和答人間名字）（幻弇）

五言絶句（宜春）、韻字「鳴・声」（下平声八庚）

五言絶句（幻弇）、韻字「陽・狂」（下平声七陽）

*これは宜春詩²²³・²²⁴への幻弇和韻が²²⁶・²²⁷、²²⁶への却寄が²²⁸で、おそらくは両方一度の書信往復で済ませたものであろう。ゆえに一括して掲載した。ただし年代不明。自らの字叔陽に対する思いを述べた宜春詩に、幻弇があえて他の韻を以て報いているところが面白い。陽韻は古来独用で、庚韻とも通用しないのである。

○第54群 雲華上人來訪詩（下巻4ウ、229～230）

「訪永寿禪房次其旧贈之韻」雲華↓（和）幻弁

五言律詩、韻字「廬・居・虚・車」（上平声六魚）

*豊前古城の正行寺（東本願寺派）住持で詩名も高かった雲華上人は、叔父法蘭（目田広円寺住職、円什）に教えを受け、かつ詩作も徂徠派大潮譲りの格調詩僧であつた叔父の薰陶を受けている。寛政六年法蘭示寂以後は南冥に師事したが、その縁で幻弁とも交流があつた。彼の幻弁來訪は、おそらくこの文化元年春だったのであるが、『雲華草』なる年次別詩稿（赤松翠陰編『雲華上人遺稿』昭和八年十一月後凋閣刊所収）のうち、文化元年前半部を欠いているがゆえに確定しえない。雲華三十二歳。ただ雲華がこの文化元年正月に博多に来ていたことは、同時期この地で久しぶりに会つた菊舎の詩から分かる（『石城客舎邂逅雲華師有詩見贈次高韻以酬』、『手折菊』所収）。

○第55群 古処雜詩六首（下巻5オ～5ウ、231～236）

「雜詩六首次韻幻弁榮公」古処

七言絶句六首、韻字①「東・同・中」（上平声一東）②「維・宜・奇」（上平声四支）③「徠・才・恢」（上平声十灰）④「言・尊・軒」（上平声十三元）⑤「臣・身・春」（上平声十一真）⑥「通・風・中」（上平声一東）

*前年十月頃に行われた幻弁「雜詩六首」に起因する唱和（上巻15ウ～17）は、幻弁、南冥、宜春の間で繰り広げられたが、秋月の原古処に伝わるまで時差があり、遅ればせながらこの初春の某日に古処が次韻したのである。

う。とすれば本書の配列はある程度制作時順の意識が存したということにもなる。古処詩稿は現在文化元年分を欠くゆえに、年代確定できないが、あるいは本書のこの位置がそれを物語るか。

○第56群 早春遊望詩（下巻5ウ、6オ、237、238）

「早春遊望」 宜春↓（和） 幻弇

五言律詩、韻字「融・風・通・中」（上平声一東）

*文化元年正月作であろう。

○第57群ノ一 古黃山暮春唱和（下巻6オ、6ウ、239、241）

「古黃山雨中作贈一字庵主」 幻弇↓（和） 宜春↓（再和） 幻弇

五言律詩、韻字「堂・牀・忙・忘」（下平声七陽）

▽第57群ノ二 古黃山暮春唱和続き（下巻6ウ、242、243）

「暮春寓太宰府訪古黃山禪室」 菊舎↓（和） 幻弇

七言絶句、韻字「端・寒・彈」（菊）「闌・寒・彈」（幻）（上平声十四寒）

*以上の二つの唱和はおそらく同時に催されたものであろう。文化元年の春、まだ福岡滞在中の菊舎は、熊本行への準備のためか三月に寓居を太宰府に転じ、近くの横岳（古黃山）の禪室にいた幻弇を訪問したのである。

横岳は黒田家菩提寺崇福寺の創建地であり、慶長年間に博多の千代に移ったが、別院として禪窟を残していた。幻舛は時にここに住持していたのであろう。一字庵は菊舎の庵号。雨中に訪れた菊舎を歓迎して贈ったその幻舛詩に、宜春がまず次韻しているのは、菊舎の引率者としてここに同座していたゆえかと思われる。菊舎詩は『手折菊』にあり。

▽第57群ノ三 太宰府唱和（下巻6ウ〜7オ、244〜245）

「太宰府春雨中作【用杜牧寄隱者之韻】」菊舎↓（和）幻舛

七言絶句、韻字「蕭・遙・饒」（下平声二蕭）

*杜牧詩とは「送隱者一絶」七言絶句をいうか。「無媒徑路草蕭蕭、自古雲林遠市朝、公道世間唯白髮、貴人頭上不曾饒」。これは太宰府の寓居に帰って横岳での歓待を謝したものであろう。『手折菊』所収。すかさず幻舛は和した。

○第58群 菊舎熊本行送別詩（下巻7オ〜7ウ、246〜249）

「将赴南肥別榮公於古横山」菊舎↓（和）幻舛・（和）宜春

七言絶句、韻字「枝・時・知」（上平声四支）

「次韻菊舎尼太宰府春雨中作同榮公」宜春

七言絶句、韻字「蕭・遙・饒」（下平声二蕭）

*菊舎がいよいよ太宰府を発して熊本に赴く別宴での詠。文化元年三月。まず挨拶として菊舎尼が詠じ、それに呼応して幻弇と宜春が答えた。また249は第57群ノ三への次韻詩であるが、杜牧詩韻を踏んだこの唱和が菊舎と幻弇だけの書簡往復によつたらしく、宜春はこの別宴の際に初めてそれに触れ、和したのであろう。

○第59群 幻弇宜春唱和（下巻7ウ〜8オ、250〜251）

「暮春偶作贈戸君」幻弇↓（首夏見贈暮春偶作次韻謝答）宜春

七言絶句、韻字「香・長・光」（下平声七陽）

*菊舎を送った三月末からほど経ずして宜春あてに贈った詩に、宜春は月をこえて四月に横岳の幻弇に返すことができたのである。

○第60群 宜春幻弇唱和（下巻8オ〜8ウ、252〜253）

「呈栄公」宜春↓（和）幻弇

七言律詩、韻字「深・侵・金・心・尋」（下平声十二侵）

*この宜春詩句に「歳晚賦中窮鳥意」という。それが上巻掲載の幻弇詩178「和（冬夜作）」中の「雁声呼爾侶、燈影伴吾間」あたりを指すとすれば、これも文化元年作か。ただし幻弇詩中には「歳晚梅花何処早」の句あって、この唱和の時期も歳晚である可能性は大きい。いまは文化元年冬かと推しておく。幻弇詩冒頭には「論交十載以詩深」の句あり、二人の詩による交誼のほどが偲ばれよう。

○第61群 聖福寺唱和（下巻8ウ〜9オ、254〜255）

「過聖福禪室」幻弁↓（和）宜春

七言律詩、韻字「還・関・間・山・顔」（上平声十五刪）

*二人が聖福寺を訪れた際の吟詠。宜春詩中に「石門寒雨溪橋滑」とあり、冬頃の作か。前群の唱和の流れからすれば、おそらく文化元年作。

○第62群 武雄唱和他（下巻9オ〜11ウ、256〜269）

「武雄客舎五首」幻弁↓（次韻）南冥・（同）古処・（同）宜春

五言律詩五首、韻字①「間・山・顔・寰」（上平声十五刪）②「塵・春・人・親」（上平声十一真）③「哉・

堆・回・杯」（上平声十灰）④「郷・湯・霜・忘」（下平声七陽）⑤「祠・期・姿・時」（上平声四支）

*ここより幻弁と宜春の武雄温泉詩とそれに関する唱和。この入湯旅行は幻弁と宜春が実際に赴いた際の詠に、諸家が唱和したもので、南冥稿（『壬戌・癸亥・甲子稿』、前掲）中の記載位置や古処自筆詩稿（秋月郷土館蔵『辛酉壬戌稿』）によれば、この旅行は享和二年初冬であった。南冥詩は幻弁詩の第二に、古処詩は第一に、宜春詩は第二に、各人一首ずつ和す。

「武雄山歌贈幻弁禪師」宜春

七言古詩、韻字「巍・祠・眉・芝・威・師・旗・維・夷・夷・池・期・奇・滋・沂・微」（上平声四支・五微通韻）

*三十句にわたる堂々たる長篇で、武雄山の威容と幻弁の風姿を描いたこの旅中吟はここに単独に掲載され、唱和はない。支微韻の相通は古詩の場合には許されることで、江戸から明治によく使われた邵長蘅『古今韻略』でも、支微齊佳灰の通韻を挙げる。

「途中望武雄山喜賦」幻弁↓（和）南冥

七言絶句、韻字「間・攀・山」（上平声十五刪）

*ここにおける一連の幻弁詩作は、旅先から福岡の南冥に送られたもので、南冥もまた次韻詩を贈った。

「十月朔遊旅主人子三平導觀武雄別館温泉発源於庭中大石之下引入浴室清潔無比乃驪山之勝可想也」幻弁

七言絶句、韻字「開・来・萊」（上平声十灰）

「次韻禪月尊者却寄」古処

七言絶句二首、韻字①「間・攀・山」（上平声十五刪）②「開・来・萊」（上平声十灰）

*韻字からも分かるように、古処のこの二首は、幻弁の武雄での二種の吟詠に対して各々に次韻する。おそらくは旅先の幻弁から秋月にまとめて送られてきた稿に後日答えたもので、武雄での詠とはいえないが、直接次韻したものとしてここに一括しておく。

○第63群 遊山寺唱和（下巻11ウ、13ウ、270、279）

「過山寺」龍門↓（和）幻弁↓（寄栄公用其旧作韻）宜春↓（和）幻弁↓（寄懷禪月尊者用其遊山寺韻）古処↓

（再疊韻答原文学士萌見寄時余自南遊帰故及）幻弁↓（再疊韻寄幻弁栄公）古処↓（仲冬望賞月有懷幻弁師古

処山人用其旧示之韻二首）南冥・（幻弇師有五言長城之称久矣独原古処不快於心互相唱和切劘不已至其体裁風格各長其長能進而不能退可謂元白詩簡又見今日矣余旁觀壯之次韻却寄）南冥

七言絶句、韻字「林・心・陰・尋」（下平声十二侵）

*龍門こと豪商松永子登の原詩に和した幻弇の絶句（271）が、ここでの唱和の発端となっている。ただしこの最初の応酬の時期は詳らかではなく、山寺もいづれかを特定できない。それが享和二年になってなぜか唱和が再燃し、冬に至つてようやく収束していったごとくであつた。制作年代がほぼ分かるのは、古処の第一詩（274）からで、これは彼の自筆稿本『辛酉壬戌稿』中の位置からすれば、享和二年春の頃にあたる。しかし、次の幻弇の晷韻詩は彼の南遊から帰つて後のもので、再び古処がその韻を次いだ（276）のは、『辛酉壬戌稿』から見ても、同年冬も歳末近くであつたと思しい。「堅氷歲欲陰」の詩句がそれを裏付けることになろうか。最後の南冥の三首のうち、先の二首がこの年の仲冬十一月十五日の作なること、題詞にもある通りだが、やや長い題詞のある末尾のものも同時期の詠であることが、南冥の『壬戌稿』（前出）の記載位置から推察できる。古詩を得意とした古処にとつて、幻弇の「五言長城」の称は大いに對抗意識を刺激されたとみえ、この唱和もそれがゆえに冬まで続けられたのであつた。

○第64群 太宰府唱和（下巻13ウ、14ウ、280、283）

「都府秋望」天均↓（和）幻弇↓（同）宜春・（寄懷幻弇師用其和平子敬韻）古処

七言律詩 韻字「第・春・峯・鐘・容」（天均）「宗・第・峯・蹤・春」（幻弇・宜春・古処）（上平声二冬）

*福岡の金石学者として名を残す梶原天均（平子敬）がはじめて本書中に登場する。幻弇の和詩冒頭に「福陵平子旧華宗」なる句あり、あるいは天均の前歴を示すものか。原詩は、享和二年、彼が太宰府都府楼近辺の調査に行った際、幻弇あてに送った詩であつたらしい。宜春と古処の作は、幻弇詩に触発されての和韻と思しく、二人が梶原と直接交流あつたかどうかは疑問である。古処の寄懷詩は『辛酉壬戌稿』では享和二年の終わり近くにしたためられるので、秋の天均幻弇唱和からしばらく経った冬頃の作か。

○第65群 玉泉夫人帰京送別詩次韻詩（下巻14ウ、16ウ、284、303）

「送玉泉夫人帰京師十首」古処↓「寄原士萌用其近什韻十首」宜春

七言絶句十首、韻字①「飛・畿・衣」（古処）「飛・霏・衣」（宜春）（上平声五微）②「通・東・中」（上平声一東）③「濤・逃・高」（下平声四豪）④「奇・祠・誰」（上平声四支）⑤「繁・魂・言」（上平声十三元）⑥「梅・開・台」（上平声十灰）⑦「間・灣・山」（古処）「間・班・山」（宜春）（上平声十五刪）⑧「顔・斑・班」（上平声十五刪）⑨「月・髮・闕」（入声六月）⑩「砂・霞・花」（下平声六麻）

*これも前群と同じく享和二年作。古処詩は、当代秋月藩主黒田長舒（号朝陽）の側室玉泉夫人の京都帰省に際しての送別詩。宜春もその別宴に侍したのではなく、何かのときに示された古処詩を面白く思い、十首すべてに次韻したにすぎない。古処作はその『辛酉壬戌稿』中では初冬辺に記入されており、第六に「十月江南好討梅」とある。享和二年十月の発駕とみてよいだろう。

玉泉夫人は京都三条家（転法輪家）の諸大夫森寺長門守の女、通称きん。天明五年二月に十七歳で長舒の側室

となっているから、この享和二年は三十四歳にあたる。既に男女数子を挙げているが、中でも寛政四年に夫人の生んだ秀五郎なる子が、夭折した福岡黒田本家の藩主黒田斉清としてすりかえられ、のち明君となったことは、近世期から信憑性の高い逸事として関係者の口に乗っていた。寛政〳文化年間初期に、長舒が本藩主の後見役として北筑に絶大な權威をふるい、秋月に文化的な画期を築いたことも、このことが遠因といわれる。本書に後出する黒田巻阿も玉泉夫人の子で、詩をよくしたが、のちに木下家に入籍して代記と称した（森寺氏のこととは山田新一郎「福岡易儲遺聞」筑紫史談十一・十二集による）。この時期における夫人の隠然たる地位、古処がこれほど力を入れて送別詩を奉呈していることから窺えよう。

○第66群 古処幻弇唱和（下巻16ウ〳17オ、304〳305）

「古黄山訪幻弇栄公不值」古処↓（和）幻弇

七言絶句、韻字「林・深・襟」（下平声十二侵）

*この古処の古黄山（横岳）訪問は、古処詩稿『辛酉壬戌稿』の題詞小書によれば、享和二年二月二十八日であった。

○第67群 首春唱和（下巻17オ〳17ウ、306〳313）

「首春詠四首」古処↓（和）幻弇

五言絶句四首、韻字①「悦・雪」（入声九屑）②「詩・誰」（上平声四支）③「岸・雁」（去声翰・諫）④「青・

醒」(下平声九青)

* 享和二年首春詠。第三の韻字は古詩の翰韻・諫韻の通韻を適用したもののか。この古処首春詠は、本書の配列からすれば翌享和三年正月の作と解してしまいが、実は古処『辛酉壬戌稿』享和二年の冒頭に置かれていて、この年の正月詠であることが判明する。

○第68群 菊舎尼鶴篋裘歌次韻(下巻17ウ、18ウ、314、316)

「一字庵主見跡鶴篋裘歌三首即長府君侯自東觀帰有琴衣之賜因誌喜也余亦賦唐体一首以贈」幻弁↓「幻弁禪師読余鶴篋裘歌有詩見贈次高韻奉酬」菊舎↓「榮公和菊舎尼歌見寄余亦次韻傲顰」宜春

七言律詩、韻字「衣・輝・飛・依・稀」(上平声五微)

* 幻弁題詞にある長府侯毛利元義からの「琴衣之賜」は、菊舎尼の『手折菊』(文化九年刊)に見え、その配列からすれば文化二年冬、菊舎五十三歳のことであった(『田上菊舎全集下』による)。ただし「鶴篋裘歌」自体に関しては詳らかでない。榮譽に感じた菊舎の感懐和歌があったと想定するのもよいかと思うが、『手折菊』にそれらしい和歌は見られぬ代わりに、九州の文人連中にその事を聞かせたく思い、急に旅立ちを決する際の発句二句がある。

君侯より琴士の服する鶴篋なる物を玉はりけるを、南州の諸先生に吹聴せばと思ひ、且は太宰府天みつ神の御まへに袖飄してんと、俄に思ひ立、杖笠とりあへず、

往て来ふか鶴に紛れて雪千里

翅打て此栄見せむ雪の雲

菊舎の詠を受けた幻弁詩には「白雪紛紛鶴氅衣」「翩躑時抱瑤琴去」などといった句があり、幻弁のいう「鶴氅裘歌三首」とは、和歌ではなく、この二句を含む発句三句を指す可能性もある。発途は十二月くらいになつたのではなからうか。

○第69群 丙寅元旦唱和（下巻18ウ、23オ、317、346）

「丙寅元旦試墨」幻弁↓（和）南冥・（同）宜春

七言絶句、韻字「分・薰・雲」（上平声十二文）

*この元旦詩群は丙寅文化三年の歳旦詩が並ぶ箇所、韻字の相違によつてさらにいくつかの作品群に分けられる。ただし各々の制作時期を詳らかにしないので、あえて分けなかつた。最初のこの一群は、直前の菊舎尼との応酬と無関係ではなく、幻弁詩には、以前菊舎から貰つた長崎の清人費晴湖の書を禪室に掛けて新年を迎えたことが詠じられ、南冥詩もそれを受けた表現をとる。かつて菊舎が長崎で費晴湖の贈詩を受けたのは寛政八年、彼女の二度目の崎陽滞在時であつたが（『手折菊』）、その染筆に発句一つを添え、文化元年春、博多滞留中、幻弁に贈つたことが317の詩注に見える。菊舎、この歳旦詩の作られた文化三年正月は福岡に居て、あるいはこの幻弁・南冥詩は彼女を囲む新年会にでも披露されたということでもあつたか。

「丙寅元旦」宜春↓（和）幻弁・（同）南冥・（同）龍門↓（晝韻和子登次韻余元旦詩見贈）宜春
七言律詩、韻字「春・塵・親・均・民」（上平声十一真）

*歳旦詩群の第二は、戸次宜春作が発端となった唱和で、和韻連鎖は宜春に戻ってくる。この年四十となった宜春はこの時退役の意を決したごとくで、葉院の邸宅に帰田せんとすることが語られる。宜春詩に「煮塩地古土膏均」の句あり、詩注に「葉院は古く塩田の地なり」とあるのが珍しく、塩入町なる旧地名も思い出される。

「丙寅元日」龍門↓(和) 幻弇・(同) 宜春・(用子登韻呈榮公) 宜春

五言律詩、韻字「陽・芳・長・觴」(下平声七陽)

*第三は、松永子登(龍門)の正月宴での唱和。この年は子登母の賀宴であつたごとくで、幻弇詩後半は「才名兼歲富、孝思与天長、阿母高堂宴、九霞称幾觴」の句あり。最後の宜春詩のみ次韻詩なるも、あるいは別席の詠か。

「丙寅元日六絶」南冥↓「次韻兼呈榮公六首」↓(和) 幻弇

七言絶句六首、韻字①「飛・暉・菲」(上平声五微) ②「詩・離・枝」(上平声四支) ③「哉・来・杯」(上平声十灰) ④「杯・開・梅」(上平声十灰) ⑤「花・車・家」(下平声六麻) ⑥「人・春・親」(上平声十一真)

*歳旦の第四群は南冥元旦宴での詩に、宜春と幻弇が次いだもの。南冥六十四歳、廃黜後の比較的平静な心境が述べられ、兩人もまたそれを古文辞学派らしく典雅かつ豪奢な調子で寿ぐ。

○第70群 正月二日寄菊舍尼詩(下卷23オ、24オ、347、349)

「丙寅正月二日雪寄懷琴客菊舍在筱栗邨」幻弇↓(和) 南冥・(寄菊舍教尼在筱栗邨用榮禪師韻) 宜春
七言律詩、韻字「仙・川・烟・年・前」(下平声一先)

*例の鶴警裘拝領を吹聴するために、菊舎尼は文化二年末から福岡に滞在し、そのまま越年した。滞留先は筑前篠栗村の群島（村島？）氏宅である。二日の書信で幻弁は菊舎に贈詩し、南冥・宜春はややこれに遅れての次韻であろう。

○第71群 正月十日篠栗唱和（下巻24オ～24ウ、350～351）

「孟春十日遊篠栗邨作」幻弁↓（和）宜春

七言律詩、韻字「年・然・烟・川・憐」（下平声一先）

*今度は実際に幻弁と宜春が、菊舎のいる篠栗に赴いての詠。年末から滞在していた菊舎は、明けて文化三年一月十五日には長府に帰宅している（『手折菊』）。

○第72群 文化三年次韻疊韻詩（下巻24ウ～27オ、352～362）

「疊韻和答南冥主人」幻弁↓（疊柴公韻贈南冥先生）宜春・（同）龍門↓（和）南冥↓（疊韻贈幻弁尊者）宜春

↓（和）幻弁↓（次韻呈幻弁尊者）龍門↓（和）幻弁・（同）宜春

七言律詩、韻字「仙・川・烟・年・前」（下平声一先）

*この次韻詩群は、前掲第70群における正月二日の菊舎への寄詩（幻弁・南冥）と同韻なので、時同じくして連鎖していったものと見えるが、そうではない。内容的には菊舎のことを完全に離れており、おそらくは他日、この韻を借りて幻弁が南冥に所懐をのべたことを発端とするものと思われる。南冥の『乙丑丙寅稿』（慶応大

学斯道文庫蔵)の記載状況によれば、それは正月十日以降のことであつた。経緯は次のように想定されようか。まづ、幻弇が先日自分たちの使った韻を借りて再び南冥に返す形で、詠みかける。その作を示された宜春がやはり南冥あてに同韻の詩を作る。さらにその二詩に加うるに松永子登が自作をもつてする。その最後の子登作に答える形で再度南冥が作詩した(355)ことは、『丙寅稿』でのこの詩に「疊韻酬松子登見贈」と題されることから知れる。一応ここで途絶えたかと思いきや、今度はこの韻を使つて宜春が幻弇に詠みかけた。当然ながら幻弇の和答あり。その幻弇詩の韻をさらに子登が次ぎ、また幻弇と宜春がそれに答えた、と。

「疊韻贈宜春戸君」龍門↓(疊韻示子登)宜春

七言律詩、韻字「春・塵・親・均・民」(上平声十一真)(龍門)・「仙・川・烟・年・前」(下平声一先)(宜春)

*この二首もおそらくは前半の次韻詩群とほぼ時を同じくしたものであろうが、子登(龍門)は一先を用いずして元旦詩に使った真韻を持つてくる。この詩は四十歳で致仕を決したごとの宜春の心境を思いやったもので、直前の詩群とは異なり、正月の宜春・幻弇・南冥・子登の次韻にさらに重ねた作。それに答えるに宜春は次韻の形を採らず、またしてもこの正月の応酬に使われた先韻をもつて返したところが面白い。

○第73群 文化三年首春大雪詩(下卷27オ〜27ウ、363〜365)

「首春大雪寄榮公」古処↓(和)幻弇・(次韻秋府原文學贈榮公之詩)宜春
七言絶句、韻字「台・哀・来」(上平声十灰)

*この発端となった古処の大雪詩は、かれの年次別自筆稿が文化元～三年分を欠くがゆえに、年代の確定ができない。しかし、享和三年（上巻所収）に続いて文化三年正月にも筑前に大きな積雪があったと見え、南冥は正月二日に積雪詩三首を作っており（前掲『乙丑丙寅稿』）、おそらくは古処詩もこの時のものであろう。これを古処は秋月において詠んでおり、書信で博多にいた幻弁に送り、それを見せられた宜春がさらに韻を次いだのであった。幻弁詩には、古処の親友で文化元年七月に亡くなった秋月藩士吉田九華の名も読み込まれる。

○第74群 太宰府雅宴即時詩（下巻27ウ～28オ、366～368）

「東原文学士萌従侯駕在太宰府兼呈卷阿公子」幻弁↓（次韻禪月老師贈原震平兼見示之作却寄）卷阿・（西都謠集）
集黄山柴公病不至有詩見寄次韻謝呈）古処

七言律詩、韻字「苔・哉・才・開・回」（上平声十灰）

*これは文化三年三月十日に挙行された、秋月藩主黒田長舒主催になる太宰府書画会の際の、即時の唱和である。この日の会の模様に関しては、既に宮崎が論文「祭酒期の原古処とその周囲」（『福岡県史 近世研究編 福岡藩（四）』平成元年六月刊）において概観したことがあり、黒田本藩の幼主だったために、この時期長舒が筑前全域にわたって絶大な権限を及ぼし、かつ文化事業の活性化をはかっていたことも前に述べた。この書画会はその象徴的な盛事で、翌年に急逝する長舒の、最後の花やいだ行事となったのだが、会はこの地域の文人三十人ほどが会し、出品は江戸からのものを含めて百一名にも上る。長舒の二人の公子卷阿・蔵春に陪して古処も西都に赴いたが、福岡からは亀井南冥・昭陽父子も長舒の召に応じて来り、会后そのまま秋月に招かれて十日間

ほど過ごしている。肝心の幻舁は病臥して参会できず、それを謝す手簡とともに送られたのが最初の詩366であり、既に太宰府に来ていた卷阿公子と古処が即吟で返したのである。詩作を好んだ卷阿の面影の窺える詠でもある。二公子は黒田長璣（名利亮、号卷阿、のち木下内記。天明八年生）と黒田長尚（号蔵春、のち萱野雪心。寛政三年生）の兄弟で、母はともに前出の側室森寺氏（玉泉夫人）である。亀井流の古文辞学の洗礼をうけ、特に兄卷阿は詩作によつて古処と親炙した。

この断りの詩を送つた際か、あるいはそれに先立つ二月二十二日、幻舁は秋月の古処に書簡を發している（秋月郷土館蔵）。拙稿にも一部紹介したが、前群の唱和とも関わるので、あらためて全文を掲げておきたい。

花朝後一日貴翰、再昨落掌、薰読十回。龍窩和暄之候、益御莊寧御教授被成候旨、奉喜慰候。然者来月十日頃、於太宰府雅集御催之御沙汰被在之候由、御日限弥御決定被成候。右可被仰知旨辱承知仕候。且也其節、不慧古跡迄罷出居申候はゞ、参席仕候様蒙御徳憑、千萬辱不堪感戴奉存候。其節者必越策可仕存念罷在候。乍然病懶之拙義、加之、弊居無人得参上仕義も可有御座候。御賢慮 閣下宜御転達奉依頼候。拙書豎物之義蒙命候。不日相調指出可申候。

雪中御寄詩、千々辱感吟仕候。甚乍不韻、拙和致呈御叱擲可被下候。歳首来、与戸生等少々唱和出来仕候。一二呈覽仕度候得共、不能草写候。尚期後書候。如来諭花卉発英之節、新編御堆案奉察候。御寄示所祈御座候。草々拝復頓首。

二月廿二日

幻舁 敬復

古処原君
玉机

「古跡」とは横岳の崇福寺跡をいうのであろう。長舒の命に従って書こうとした幻弇の「堅物」は、現存の書画展観目録によれば「草書二行」。しかしここに予告していたごとく、病をもって幻弇の出席はかなわなかった。また書簡末尾の「雪中御寄詩」が第73群最初の古処詩と思われるので、この群も文化三年と推定してみたのである。幻弇の和韻詩はこの書簡とともに送られたものか。また「歳首来、与戸生等少々唱和出来」というのが、第69〜72群、さらに後出の第75群にかけて盛んに繰り返された戸次宜春（戸生）らとの唱和を指すとみてよいだろう。

○第75群 二月六日雪詩（下巻28オ〜29オ、369〜380）

「丙寅二月六日雪漫成寄戸君宜春六首」幻弇↓（和）宜春

五言絶句六首、韻字①「新・春」（上平声十一真）②「寒・難」（上平声十四寒）③「還（来）・間」（上平声十五刪）④「忙・腸」（下平声七陽）⑤「春・麟」（上平声十一真）⑥「枝・姿」（上平声四支）

*文化三年二月六日には一月に続いてまた降雪があった。幻弇第三詩の第二句は「春寒去復来」となっていて押韻しない。宜春詩の第三詩第二句末が「還」となっているところからして、その誤写か。「春寒去復還」となるべき箇所である。

○第76群 梅処贈詩（下卷29オ、29ウ、381、382）

「寄懷宜春戸君」梅処↓（和）宜春

七言律詩、韻字「春・巾・頻・人・津」（上平声十一真）

*長州の呉林梅処の寄懷詩は、郵書でもたらされたものと思うが、年代未詳。他と同じく、宜春の四十歳を区切りに退隱の意志のあったことに対する諸家の寄詩の一つと考え、いまは文化三年作と推定しておく。

○第77群 青桂堂唱和（下卷29ウ、30オ、383、386）

「初冬陪幻弇尊者南冥先生及月玄飛過青桂堂席上作」龍門↓（和）南冥・（同二首）幻弇

五言律詩、韻字「情・晴・声・成」（下平声八庚）

*青桂堂、前稿では宜春の書室かとしたが、未だ詳らかでない。月玄飛はおそらく南冥の親しかった福岡藩の月成大夫と思われるから、藩閥老か誰かの書室か、あるいは松永子登の知人の商家か。南冥の『乙丑丙寅稿』には「青圭堂」に作る。また、同稿中に付録された幻弇詩の題から、この唱和の文化二年乙丑十月十二日作であることが判明する。この唱和の面白さは次韻詩よりも、当日その前提となった聯句が偶然行われたことによる。幻弇詩二首のうち、第二詩の七・八句は「南国彈箏後、斷絃工統成」。その注にいう、「席上、南冥語りて曰く、余、昔、肥前に遊び武富氏の家を過ぐる。其の女箏を弾じ、一絶句を賦す。今、唯だ「青年二十三絃」の一句を記すのみ、と。幻弇曰く、佳句なり、請ふらくは聯句以て之れに足さん、と。即ち唱ひて曰く「知就何人指上伝」、南冥曰く「英彦山中流水引」、幻曰く「併将佳月弄嬋娟」、遂に成れり。子登執筆して之れを写し、

玄飛掌を撃ちて称好するも、亦た一時の雅賞なり。故に七・八之れに及ぶ（原漢文）と。この詩注、南冥稿『乙丑丙寅稿』の記載からすれば、幻舛によるもののごとくである。

○第78群 仲春太宰府参詣詩（下巻30ウ、31オ、387、389）

「仲春詣太宰府菅祠」省園↓（和）龍門・（同）幻舛

七言律詩、韻字「郷・傍・光・方・霜」（省園）「郷・長・光・方・香」（龍門）「傍・蒼・郷・光・香」（幻舛）（いづれも下平声七陽）

*本書の校訂者の一人、樋口省園がここに初めて登場する。年代未詳。

○第79群 帰雁詩（下巻31オ、390、391）

「帰雁」省園↓（和）玉蘭

七言絶句、韻字「飛・微・帰」（上平声五微）

*この唱和も年代未詳。この第78・79群は、省園詩に発した諸家次韻ゆえ、本書編集に参画した省園が遠慮して、自己手持ちの詩稿を末尾近くに置いたということであろうか。

○第80群 亦樂園聯句二首（下巻31ウ、392、393）

「春日過亦樂園聯句」①幻舛（前二句）↓宜春（後二句）②宜春（前二句）↓幻舛（後二句）

七言絶句二首、韻字①「闌・塵・春」(上平声十一真)②「園・繁・門」(上平声十三元)

*ここより三題、聯句が並ぶ。第77群文化二年十月十二日の青桂堂聯句とともに、年代に係なく、特殊な作たるによって末尾付近に集められたものと思われる。詩僧をもって任じる幻弇とほぼ互角に応酬する、藩士戸次宜春の作詩の自在さを示すものもあり、亀井門下の格調詩人としてさらに評価してしかるべきかと思う。

○第81群 中洲別宴聯句二首(下卷31ウ〜32オ、394〜395)

「中洲宴別戸監祗役浪華聯句」①宜春(前二句)↓幻弇(後二句)②滄洲(前二句)↓幻弇(後二句)

七言絶句二首、韻字①「開・催・梅」(上平声十灰)②「傾・城・情」(下平声八庚)

*藩士として宜春の大坂出張した際の別宴での作。年代未詳。第二詩に再登場する滄洲吉川子允についても、前稿で奥村玉蘭の兄弟かと推してみたが、未詳。

○第82群 六月十五夜聯句(下卷32オ、396)

「六月十五夜聯句」南冥↓幻弇↓南冥↓幻弇↓幻弇↓南冥↓幻弇↓南冥↓幻弇↓南冥

五言律詩、韻字「城・更・情・生」(下平声八庚)

*これは前二群と異なり、一句づつの聯となっている。惜しむらくは年代未詳。

○第83群 七夕唱和(下卷32オ〜32ウ、397〜398)

「星夕偶作」省園↓(和)龍門

七言絶句、韻字「鉤・楼・愁」(下平声十一尤)

*年代未詳。これも編者同士の和韻ゆえ、憚って末尾に附したものだと思われる。あるいは刊行に際して新たに詠作したか。

○

この下巻は、上巻ほどの整然たる構成を有していない。上巻は享和三年中の作品がほぼ成立順に並べられていたが、明けて文化元年歳旦の詩群から始まる下巻の内容は、それに次ぐ時期の作品群といえるのであろうか。

如上の考察において各唱和群の成立年次を推定してみたが、もう一度それを総観しておくとか次のようになる。

第50～52群(207～222)……文化元年歳旦詩群

第53～56群(223～238)……文化元年正月作と推定

第57～59群(239～251)……菊舎尼熊本送行詩群、文化元年三～四月

第60～61群(252～255)……宜春幻弇唱和、未詳だが文化元年冬頃かと推定

第62群(256～269)……武雄唱和、享和二年初冬作

第63群(270～279)……遊山寺唱和、原詩の成立は不明だが、諸家唱和は享和二年春～冬

第64群(280～283)……太宰府唱和、享和二年秋～冬

第65群(284～303)……玉泉夫人帰京送別詩、享和二年初冬

第66群(304～305)……古処幻弇唱和、享和二年二月末

第67群(306～313)……古処幻弇首春唱和、享和二年正月作

第68群(314～316)……菊舎尼鶴篋裘歌次韻、文化二年十二月

第69群(317～346)……元旦唱和、文化三年正月

第70～71群(347～351)……菊舎篠栗寓居唱和、文化三年一月

第72～73群(352～365)……諸家次韻詩・大雪詩、文化三年一月

第74群(366～368)……太宰府雅宴即時詩、文化三年三月

第75群(369～380)……雪詩、文化三年二月

第76群(381～382)……呉梅処贈詩、成立年代未詳なるも文化三年頃か

第77群(383～386)……青桂堂唱和、文化二年十月十二日作

第78～79群(387～391)……樋口省園唱和詩、年代未詳

第80～82群(392～396)……聯句、年代未詳

第83群(397～398)……七夕唱和、年代未詳

あらためて見れば、作成年次によって作品群がさらに大きく分けうることに気付くであろう。すなわち、

第50～61群……文化元年作

第62～67群……享和二年作

第68～76群：文化三年正月前後作

第77～83群：付録的部分

の四部分である。

とはいえ、かく四分割するにはいささか横暴の感もぬぐえない。第60・61群を文化元年作とする、また第76群を文化三年作とする根拠を、まだ見出せないからである。ただ、第76群の呉梅処の戸次宜春にあてた寄懐詩に關していえば、その前に連なる丙寅文化三年の諸家新春詠の数々に、宜春四十を寿ぎ、かつその退隱を仄めかすがごとき字句が多く見え、この梅処も郵書でわざわざ寄詩しているらしいところからして、その同時の作かとみなしたのである。では次の第77群青桂堂唱和で文化二年に戻るのなぜか、という疑問も生じないではないが、これは幻弇詩注にある聯句の面白さをあわせて紹介する意図が編者にあつて、他の聯句とともにあえて末尾に位置させてみたと解せる。この一群が付録的な要素をもっていることは、たとえば『郷土先賢詩集』なる雜稿一冊（九州大学附屬圖書館藏）中に合綴される「石城唱和集卷之上」（写本11丁55首存）において、この青桂堂唱和がそれ以下の聯句類と一団として写されている、といった状況からも判断できようか。ちなみにこの殘闕写本「石城唱和集卷之上」は現存刊本の巻上の抄写などではなく、それとはまったく異なる配列をもっているものだが、原・稿本の痕跡とおもわれる要素や、それに伴う別の配列規則性も、いまひとつ分明でない点が惜しい。

しかし大雜把に見積もつて下巻をこの四部分に分割できるとすれば、享和三年中作を収めた上巻に対して、その前後に成立した作品群を、ここに収録したということになる。そしてこの四群の配列が成立時の順ではなく、相前後する点があることは、編者の手元に稿本が集められた時点で、題詞に干支のある作とその関連作以外は、

早くも各々成立の年代が認識しにくくなっていたことを示すものであろう。整然たる上巻と、このやや雑然とした下巻とは、編集時期が異なっていたことも考慮に入れるべきか。

それでは、刊年の記載のないこの『石城唱和集』は、いつ出版されたのか。この件に関しては既に所見の大略を述べたことがあるが（『福岡県史 通史編 福岡藩 文化（下）』平成六年三月刊）、ここでさらに敷衍しつつ記す。この享和二年から文化三年中の唱和を集めたこの詩集の刊行がそれ以後であることはいうまでもないが、従来、亀井昭陽の題言の年記「癸亥三月」（享和三年三月）がともすれば刊行時と錯覚されてきた。前稿でも述べたように、享和三年春の盛んなる唱和の跡がいつしか一冊にまとまり、それへの題詞として書かれた昭陽文がここに流用されたのであって、上巻だけを翻せばその誤解は無理からぬものともいえる。しかしその後の詩人たちの韻事多繁さゆえに、この享和三年春稿に自然と肉付けがほどこされ、この企図も既存の享和二年稿、あるいは続く文化元年稿を加えてふくれあがった末、ようやく文化三年の春で一応の区切りをつけることとなったと想像される。またこの春三月、秋月侯主催になる大規模な書画展観会が太宰府で開催されたことと、あらためて本書編纂の開始されたこととは無縁ではあるまい。以後、この年までの稿を整理編集したとして、翌文化四年春あたりの刊行というのが通例であろうが、それは出版というものが総合的産業として定着した三都の場合であって、福博の地において、はたしてその速度で開版の実現をみたのか否か。

結論からいえば、文化四年中の発刊は無理であったと思われる。それは単に出版機構の有無に起因するのみではない。文化三年十月八日に参観の途についた黒田長舒に（『秋城御年譜』、「甘木市史資料近世編第一集」所収による。以下の藩主動向についてはおおむねこれに従う）、この時は入集者の巻阿公子や亀井昭陽らも随従した。帰城は

翌年四月一日。それからすぐ長舒は長崎警備に本家代番として赴き、アメリカ船の帰帆を促すなど事多かったが、七月に再び代番、九月には江戸の世子長房の縁談取決め、九月にはこの年三度目の長崎代番と多忙をきわめ、十月十六日、過労のためか遂に不帰の客となったのである。享年四十三。おそらく博多では時同じうして、松永子登のもと宜春や幻弇が稿を持ち寄り編集が続けられ、文化四年後半期はそれもほとんど終了していた時期ではないかと思うが、長舒逝去はこの計画全体を頓挫させかねないほどの衝撃であつたことだろう。前述したように、この時期における秋月藩主の影響力、それはほとんど福岡藩主と同等のものがあつたからであり、ましてや公子や側室、また藩士原古処らもその名を著す詩集であれば、さらに憚るべき筈だつた筈だからである。編者側は長くて三年服喪、刊行は事実上二年の延引として、文化七年ないし八年あたりまで遅らすべきである、と考えたのではないか。

長舒の死は、長崎代番中にあつたために、公式には翌文化五年二月四日に発表された。二十歳の長房が四月九日に襲封、六月十二日には初の入国を果す。八月十五日長崎にてイギリス船の暴動、いわゆるフエートン号事件が勃発。十一月には初の参観交代に出たものの、英船狼藉の責任をとつて逼塞させられた佐賀侯に代わつて長房が警備を命ぜられ、あわてて帰国。そのまま長崎へ急行するなど、新藩主にとつても落ち着かぬ一年であつた。しかし文化六、七年はほぼ安泰に過ぎ、七年の二月には秋月藩校稽古観の再興まで行われる。文化八年は三月に本藩の新藩主黒田斉清入部。もうこのころであれば刊行も問題ないかと思われた。

ところがここにまた、本書の世に出る機を逸しかねない事態が起つたのである。文化八年十月、秋月藩家老宮崎織部・渡辺帯刀の政道よろしからざる事を不服に思つた間・手塚・末松ら七藩士が福岡へ出訴した事件であつ

た。世に「織部崩れ」「辛未の変」と称するこの政変については、当時の経済的窮迫状態と絡めて論じた柴多一雄の論文「文化・文政期における秋月藩政の展開——文化八年の政変と財政経済政策の特質」（史淵一一八輯）に詳しい。筆者もまたその事変最中の藩主と藩校儒者原古処の動向をつぶさに追った（前掲「祭酒期の原古処とその周囲」）。政治経済はもとより、文事にいたるまで、およそこの政変ほど従来の秋月の図式に大転換を強いられたことは無かつたであろう。罷免された宮崎・渡辺は長舒時代の栄華を代表する人物で、文事にも長じ、太宰府書画会でも腕をふるっている。古処ら文人連中とも親しく、亀井門にも近い存在であり、この動乱が福岡の南冥、幻弇や宜春に与えた衝撃もただならなかつたと思われる。

しかしながら京都では、橘屋野田治兵衛によって『石城唱和集』の板行準備が着々と進捗し、おそらくは、皮肉にもこの事変の最中に刷り上ったものと思しい。というのは、前稿〈複製の部〉底本に使用した太宰府天満宮文庫本の各冊末尾には、次のような識語が墨書されているからである。

奉納 石城唱和集 一部

宿坊 検校坊

文化八辛未年十一月二十五日

松永 宗助

奥村源之丞

「快隣」（朱印）

間らの福岡出訴が十月末で、藩主長房による詮議が十一月三日。その後本藩から浦上四郎太夫が来て調査を開

始し、十二月九日に両家老罷免の申し渡し、十二月十五日には長房による藩中へ事件終結の達示があつて、事態は一応の収束にむかった。編者の松永子登（宗助）と奥村玉蘭（源之丞）が本書を太宰府社家に奉納した十一月二十五日は、まだ断罪直前の段階であつて、かなり険しい情勢の中でこれを、太宰府宮師三家の一つ検校坊当主の快隣に献納したに違いない。しかもこの日付は、刷り上つて程経ぬ期日であることをはからずも物語っているように思う。もし、本書がもっと前に刷り上つて博多に到着していたならば、あえてこのような時に奉納するのは甚だ疑問と思われるからである。松永らは、この刷立ての新着本を、かなり慌しく太宰府に持参したのではないだろうか。事件断罪後では、わずかな事を起すことも難しくなるという予感が、この機敏な商賈二人に働いたように思えてならないのである。

現存の出版記録類で本書の名が見えるのは、京都書林仲間の書肆が奉行所に出版を願ひ出て許可された書的一年毎の目録「板行御赦免書目」（宗政五十雄・若林正治編『近世京都出版資料』昭和四十年刊、所収）のみ。この文化九年「儒書之部」に、

一、石城唱和集

未刻

子登編輯者

一冊

とあつて、「未刻」なる表示が気になるところではあるが、この位置に掲載される事自体、作業工程の実態はどうであれ文化八年までは表向き未刊とされ、世上には出されていなかったなよりの証拠ではなからうか。本資料によればこの文化九年分の書物は、翌十年四月二十六日に上納されたことになっている。ちなみに菊舎尼の『手折菊』（橘屋治兵衛刊）もこれと同年に許可をうけた。ともに菊舎と親しい橘屋（野田）治兵衛の刊行物であり、『石城』の編者たちに橘治を仲介したのは、他ならぬ菊舎であつたことも想像に難くない。もつとも『手折

菊』本文中、『石城』にも掲載される菊舎詩の下には一々に「已見松永豊子登所輯石城唱和集」と割書があり、その表現からすれば『石城』が先に出来ていたようにも思えるが、反対に「赦免目録」の『手折菊』条には「未刻」の表示がない。奥村玉蘭の入銀（見返しに「筑前玉蘭堂藏」とあり）で作られた『石城』は、既に板は出来ていたものの、政治的動乱によって意識的に出版を延引し、『手折菊』出刊時にそれと共に、後追いであつかも未刊であるがごとく写本が提出されたという推察は、付会にすぎるのであろうか。

政治的動乱の最中に出来上がったと思われるこの『石城唱和集』は、その暗雲立ち込める不穏な時期にふさわしく、その後も決して円満な命運を辿ったわけではなさそうである。幻弁と宜春の盛んな唱和を基軸として、呉梅処や大含、菊舎尼ら他国人でも亀井南冥の息のかかった文人たちが名を連ね、古処を通じて秋月藩中の貴人までもその名を出しているところなど、いふなれば黒田長舒時代の繁華な文事の、最後の光芒を放つものであった。その長舒が急逝し、不満分子による政策転換によって、長舒の庇護を受けた亀井家その他の人々が急激に力を落としていく様相は、かつて寛政改革のおおきくを受けて甘棠館と亀井南冥家が廃された時に勝るとも劣らぬものがあつたと筆者は見ている。

この地域の詩風もまたそれに連動して変換していくこととなる。古詩や唐明詩の擬古・格調を重んじた古文辞派の詩風は、三都においてこそ反徂徠学の波及により既に清新な宋詩風の流行にとつて換われようとしていたが、徂徠学派が亀井家を中心に威勢を保っていたこの地に限って、寛政の文化年間においてまだ格調詩は力を失つていなかった。『石城唱和集』は終始一貫してその格調詩風で覆われているものだが、文化期に至つてなおその風を前面に押し出している点において、全国的にも珍しい産物といえるかもしれない。しかしながら、寛政

文化期の福岡秋月の文化的象徴ともいうべきこの出版物が、なぜ現在少数しか残存していないのか。それは、名を列ねた詩人たちにとっては旗色のもつとも悪い政変の真只中にこの詩集が齎され、詩人ともども時勢に翻弄された結果であるとはできないであろうか。そしてその湮滅を多少とも推進した人々の一人が、誰であろう本書の編者松永子登自身だったらしいことは、ここに付言しておいてよい。幕末明治期に活躍した福岡の朱子学者長野芳斎は晩年、郷土資料の発掘解題作業に出精したが、その成果『閩史筌蹄』の本書解題中に次のように書いているという。「子登、後に此の模擬の風を厭ひ清新の詩を為りて、此の拳を悔やむなり」（原漢文、福岡県立図書館編『閩史筌蹄筑前郷土誌解題』昭和八年十月刊による）、と。果して後に出た子登の詩集『花遁詩鈔』（天保十三年刊）には、『石城唱和集』の詩風のかけらも見当たらない。この旋回は町人らしい機転といえはいいもので、翻って、本書中幻弁と並んで詠作に力を発揮していた福岡藩士戸次宜春のまとまった詩稿類というものが、今日巷間にまったく残存しないことと、筆者には同じ意味をもった現象に見えてくるのである。

〈下巻の部畢〉